

Tony Overwater

トニー・オーバーウォーター

Atzko Kohashi

小橋敦子

東と西、静と動、柔と剛  
ユーロジャズと「和」の邂逅



Bimhuis, Amsterdam December, 2022

東洋と西洋の影響を融合させた彼らのステージは、観客の心に深く響く純粋なマジックだ！  
-カイロ・ジャズフェスティバル運営員会

小橋敦子 (Atzko Kohashi) とトニー・オーバーウォーター (Tony Overwater)、異なる国籍・文化・背景を超え、ジャズの即興演奏に根ざす2人。国際都市アムステルダムの舞台裏で、音楽への情熱と異文化への深い探求心を共有しながら、東洋と西洋の共鳴に満ちた深い音の饗宴をステージで演出している。

小橋敦子、日本出身の彼女は深い静寂と繊細なタッチで聴衆を引き込む。国境を越えた複雑なメロディで魂に響く感動を紡ぐ芸術性。そして、オランダ出身のベーシスト、トニー・オーバーウォーターはデュオに生気溢れるダイナミックなエネルギーをもたらす。力強くも繊細なベース・ラインは伝統的なジャズを超え、音楽に強靱な躍動感をプラス。二人のデュオは個性を活かし、文化や音楽が融合するなかで新たな可能性を切り開く。

「Crescent」(2021年)と「A Drum Thing」(2023年)の2つのアルバムで彼らのこだわりが感じられる。創造性と東西の影響を受けた美意識が評価され、特に「Crescent」は2022年にはオランダの「Edison Award」やドイツの「Der Preis der deutschen Schallplattenkritik」にノミネートされるなど大きな反響を呼んでいる。

ユーロジャズの面白さは、その多様性にある。互いに国境を接し小国が隣り合わせに連なるヨーロッパで、人々が行き交い、様々な文化が混じり合うようにして音楽は育まれてきた。古楽、バロック、クラシック・・・、そしてジャズにも同じことがいえる。今、こうしてオランダと日本のミュージシャンである僕らが出会い、互いに触発されながら音を奏でる。生まれ育った国も、話す言葉も、音楽の学び方も違うが、色や形の違う小片が集まってできた美しいモザイクのように、それぞれの違いをを音に出していきたい。

トニー・オーバーウォーター Tony Overwater

日本独特の美意識である「はかなさ」「無常」という言葉は、どこかジャズと繋がりがあのような気がする。一瞬の衝動から生み出される即興のフレーズは、その時だけのもの。二度と同じ演奏はできない。だからこそ、貴重であり、面白い。互いの音に耳を傾け、呼応し合い、間をとりながら、音を紡ぎ出す。ビル・エヴァンスがジャズという音楽を日本の墨絵にたとえたように、私たちの音楽もその筆の動きのように自然な流れを大切にしたい。

小橋敦子 Atzko Kohashi

## プロフィール

### 小橋敦子 Atzko Kohashi, piano

神奈川県茅ヶ崎市出身。慶応義塾大学卒。1994年から2001年までニューヨーク滞在、スティーブ・キューンに師事。2005年からオランダ、アムステルダム在住。「アムステル・モーメンツ」をはじめ、ベーシスト、ドラマー、チェリスト、ボーカル、トランペッター、パーカッショニストとのデュオやトリオ作品を次々にオランダから発信。緩やかな音楽性と音質へのこだわりで定評がある。日本、アメリカ、ヨーロッパ、3つの異なる文化を経験し、多文化的な音楽観を持つピアニストと称され、その独特なスタイルは「あたたかく、自然で、人間的な温もりがある」「深い静かな流れ」

「過不足のない音の選択は禅に共通する」と評される。2013年にデュオ

で、2016年にはトリオで来日公演し好評を博す。近年はトニー・オーバーウォーターとのデュオで活動、2022年にデュオアルバム「クレセント」がオランダのエディソンアワード・ジャズ大賞及びドイツの批評家大賞にノミネートされ、欧州で活躍する日本人ジャズ・ピアニストとして注目されている。

[www.atzkokohashi.com](http://www.atzkokohashi.com)



### トニー・オーバーウォーター Tony Overwater, contrabass

オランダ、ロッテルダム生まれ。ハーグの王立音楽院 Royal Conservatoire The Hague を卒業。ジャズというジャンルにとらわれることなく、バロック、クラシックの音楽家たちとのコラボレーションなど、様々な分野で活動。バロック音楽をジャズに取り込んだ レンブラント・フレリーク トリオをはじめ、イランのカイハン・カルホールとのコラボレーションなどその幅広い音楽性が注目される。特にアラブ音楽への造詣が深く、四分音 quarter-tone を自らの音楽に取り入れるなど、多様な音楽表現を試みている。また、ノースシー・ジャズをはじめ数多くのフェスティバルに参加、近年はロンドンのロイヤル・フェスティバルホールやドイツのケルン・フィル

ハーモニーで演奏するなど活躍が目覚ましい。子供のための音楽劇での公演、映画音楽、ダンス音楽の作曲など、多才な音楽活動はヨーロッパ内外で評価されている。1989年にポディウム賞、2002年にボーイ・エドガー賞を受賞。2022年、小橋敦子とのデュオアルバム「クレセント」が、オランダのエディソンアワード及びドイツの批評家大賞にノミネートされた。現在ハーグ王立音楽院で後進の指導にあたる。

[www.tonyoverwater.com](http://www.tonyoverwater.com)



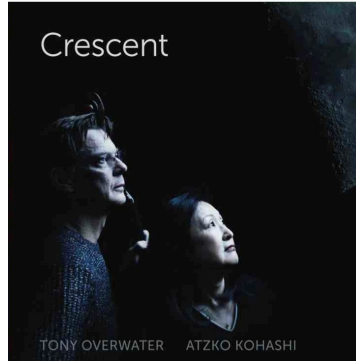
## CD作品

ア・ドラム・シング



2023年スタジオソングス及びJazz in Motion よりリリース

クレセント



日本盤



インターナショナル盤

2023年スタジオソングス及びJazz in Motion よりリリース

「クレセント」は2022年にオランダのエディソンアワード・ジャズ大賞及びドイツの批評家大賞にノミネートされました。

## デジタル音源 / Music streaming Links

A Drum Thing:

Spotify: <https://open.spotify.com/album/0KXevdp2lwKNdAiph3Pd62?si=eyb3miHIQ3KQ3AQGHbuYgg>

Apple Music: <https://music.apple.com/nl/album/a-drum-thing/1682452164>

Crescent:

Spotify: <https://open.spotify.com/album/5FNmCvxkugmkugLuL2T6Aq?si=QGLfeBXRTLgSi7IP2nLo5w>

Apple Music: <https://music.apple.com/nl/album/crescent/1600699680>

## 映像 / YouTube

Crescent ミニ・ドキュメンタリー（録音風景&インタビュー）<https://youtu.be/gRjqBxFtwqY>

Lonny's Lament デュオ演奏  
<https://youtu.be/toQT0dqOjjE>

A Drum Thing リハーサル&レコーディング（録音風景&インタビュー）  
<https://youtu.be/RTmfLwKI8AY>

It should've happened long time ago デュオ演奏  
<https://youtu.be/f3v29-S6X24>

Tale of the Fisherman デュオ演奏  
<https://youtu.be/gASguH0gKXk>

オランダTV局による教会でのライブ映像（Vpro Vrije Geluiden Session at Bij Andreas）  
[https://www.vpro.nl/vrije-geluiden/media~WO\\_VPRO\\_16865501~vpro-vrije-geluiden-sessies-atzko-ko-hashi-en-tony-overwater-bij-andreas~.html](https://www.vpro.nl/vrije-geluiden/media~WO_VPRO_16865501~vpro-vrije-geluiden-sessies-atzko-ko-hashi-en-tony-overwater-bij-andreas~.html)

## レビュー

「見事なピアノの冒険と力強いベースの構築が、変化に富むリズムとメロディーの要素と絶妙に交じり合い、深いコミュニケーションを築きあげている」

— Fono Forum/Stereo, Germany by Gerd Filtgen

「レパートリーを選択から音質、テンポ、解釈...すべてが細部まで行き届いた、極上の室内楽ジャズ」

—オランダ、エディソン・ジャズ大賞批評

「コルトレーンの音楽をサクソなしのデュオで演奏するという大胆な試みが功を奏した。Lonnie's Lamentでのベース・ソロの解釈、それをサポートする滑らかなピアノ、そこに美がある」

— Volkskrant, The Netherlands by Gijsbert Kamer

「丸みを帯びた真珠のようなピアノの音色とリリカルなベースが美しくマッチしている。これは純粋なハーモニーだ。Crescentは2人の優れたミュージシャンによる心のこもった美しいアルバムだ」

—Jazzenzo, The Netherlands

「トニー・オーバーウォーターと日本人ピアニスト、小橋敦子のデュオがジョン・コルトレーンの楽曲を扱う際の感情的な密度は、彼らがいかにコルトレーンの音楽を内面化しているかを明らかにしている。」

—Stereo, Germany

「静かに流れ、時には激しく、感情に満ち溢れた、虚飾のないアルバムだ。両者ともその雰囲気に入りながら、そこには音符を超えた対話がある。何度も繰り返し聴きたくなる、素晴らしいアルバムだ」

—Music Zoom, Italy

「彼らの演奏は深く、メランコリックで、ドラマチックで、まるでこのデュオのために書かれたように、完璧に再現された。これ以上ないほどの趣を湛えて、素晴らしい出来栄だ」

—Rootstime, Belgium by Jan van Leersum

「彼らのデュオは、コルトレーンの遺した精神を吸収し、それをそれぞれの方法で実行することに成功した。彼らの演奏にコルトレーンのクレセントの精神との繋がりをを感じる」

—Musikansich, Germany by Wolfgang Giese

「このアルバムを最大限に楽しむためには、オリジナルから解放され、このアルバムだけに専念することです。そうすれば、このデュオ録音の素晴らしい音色を理解できるようになるでしょう」

—jazz halo, Belgium by Ferdinand Dupuis-Panther

「抑制の効いたアルバムだが、フレーズの端々から感情が伝わってくる。そこに何よりの価値がある。二人のミュージシャンによる素晴らしいソロ・パートが作品を引き締めている」

—Jazz-Fun, Germany

「聴きこんで初めてわかるようなディテールに満ちている。ミュージシャンは、楽曲の持つ表現的な面よりもむしろ内省的な面に重きを置き、全体を覆う詩的で夢のようなオーラを感じさせてくれる。クレッセ

ントは、ジャズ界最高のデュエットにランクされる魅力的な音の対話だ」

—Multikulti, Poland by Krzysztof Szamot

「ピアノとベースの間には常に緊張感がみなぎっているのだが、刹那的な美意識だけが持つ高揚感に溢れている」

—高橋正廣, JazzTokyo

「ジョン・コルトレーンの精神世界に、ピアノとベースのデュオで挑戦したこのアルバムには、人間2人の魂の対話が描かれている。自由で寛容な彼らの演奏からは、生きる喜びを感じることができる」

—後藤誠, ジャズ評論家

「音の対話と同時に林の中に佇む建物、環境と音響、そして自身の音との対話に、静謐なアレンジは大胆に見えてそのエッセンスに触れることで精神的な繋がりを求めコルトレーンとも対話する。人と触れ合うことが難しくなった苦境の中で必然的に表現された丁寧で真摯な演奏は、一つ一つ聴き入らせる魅力があり、そこに我々リスナーとの対話も生み出している」

—片切真吾, イントキシケイト

「息をするかのようなエレガントで繊細なタッチを美しく響かせるピアノ、さり気なくも、あらゆる奏法を駆使するベーシストの、それへのレスポンスも見事だ」

—長門竜也, Jazz Life

## ブッキング / 連絡先

オランダ

Tony Overwater / email: [tonyoverwater@googlemail.com](mailto:tonyoverwater@googlemail.com) tel: +31(0)6 5469 6003

小橋敦子 / email: [atzko0921@gmail.com](mailto:atzko0921@gmail.com) tel: +31(0)6 1357 0948

